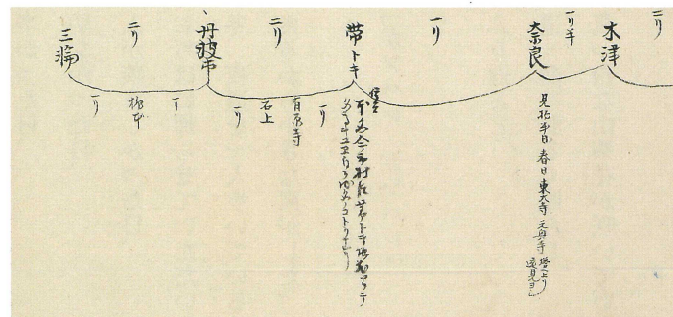
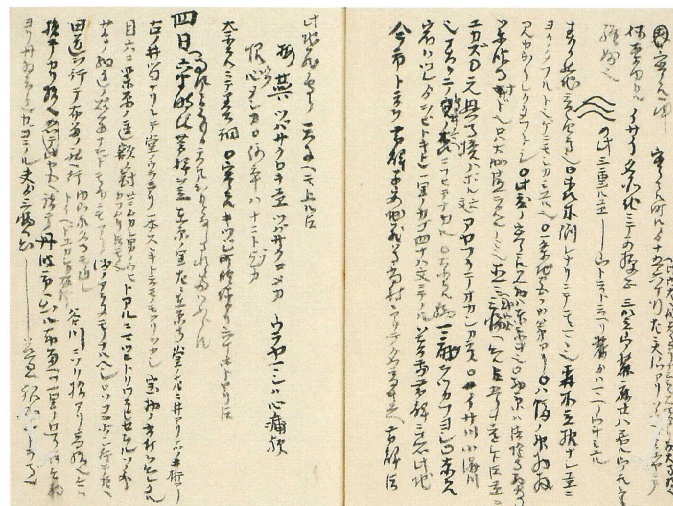




▶【おおさかきょうなら
りょちゅうびぼうろくつきりよとししょう】

伴信友自筆

1冊 付1冊

文化元年(1804)年写

上：備忘録／縦14.4cm 横10.8cm

下：旅程図(付冊)／縦9.3cm 横20.1cm



◆旅――

懷中に忍ばせた小冊子

江戸時代、人々は比較的自由に寺社参詣などの旅をしていました。武士や学者などの著名人も例外ではありません。

伴信友

(一七七三～一八四六)

は、若狭国小浜藩に

仕える武士で、国学者として大成した人物です。若い頃より本居宣長の学風を慕い、享和元年(一八〇一)

には宣長没後の門人となっ

ています。周到かつ精緻な研究で知られ、数多くの古典資料を校訂しました。

本書は、信友三十二歳の時、文化元年(一八〇四)

三・四月に若狭国小浜から近江国・山城国を経由して

大和国・大坂・京を巡った時の旅日記です。

「備忘録」は、赴いた名所・旧跡について感想を交えながら記しています。「旅程図」は、通過する地名を横線で繋いでおり、その横線の間距離が記されています。

おそらくそこまでは出発前に「旅程図」に書き込んでおき、所々の追記は旅先で書き足したのでしよう。

「備忘録」「旅程図」とともに、一般の書籍と比べれば非常に小さく、信友が懷中に忍ばせていたことを

思わせます。

旅の目的は記されていませんが、生涯にわたって畏敬し続けた宣長の大和国の

紀行文『菅笠日記』の足跡

を歩むことも理由の一つだったのでしょうか。

「備忘録」の多武峰から吉野にかけては、「スカ笠日記ニアリ」などの文言が散見されます。

特別な想いをもって歩き、また名所・旧跡を眺めたことがうかがえます。

ちなみに信友は、吉野に向かう途中で奈良町や丹波市(現天理市)にも立ち寄っています。奈良町は半日の滞在でしたが、東大寺の大仏や春日社を廻り、また元興寺では銭六文を支払って五重塔に登っています。

その後、帯解村で一泊した後、天理市域の在原寺・布留社(現石上神宮)を見学しています。

(天理図書館 澤井廣次)

＜天理図書館のお知らせ＞

Tel 0743-63-9200 URL <https://www.tcl.gr.jp/>

◇平日(午前9時～午後5時半) 土・日・祝(午前9時～午後4時半)

○12月の休館日：1日・8日・15日・22日・24日／年末年始12月27日～1月6日

(本欄にて紹介した名品の閲覧については係へお尋ねください)

※最新の情報については公式HP、X(旧 Twitter)でご確認ください。